

10月定例活動「第6回どんぐり祭り」

大館 学

毎年恒例の「どんぐり祭り」、回数を重ねるに従い運営も手際が良くなり、また今回は天白土木事務所との共催であったため土木事務所さんに花苗（ルドベキア）の提供を受け、さらに会場設営にあたりダンプカーによる荷物の運搬など全面的に協力いただき、パートナーシップのありがたさを痛感いたしました。

さて、内容はといいますと、相変わらず人気を集めたのが、「森のクラフト」コーナーで、竹やどんぐりなど森の産物を利用した工作やストーンペインティングなどに親子で楽しむ姿が最後まで見られました。



1000円の参加費で1日楽しめることで、すっかり定着した格好です。また今回は名古屋市水辺研究会から有馬さんが特別参加して下さり、ウサギやねずみのかわいらしいフィギュアに小さな子どもたちが行列を作っていました。

毎回おなじみになったツリーハガーズの指導による木登り体験も行列ができていました。

私も念願かなって初めて体験してみました。ロープにつくった輪に足を掛け、足を蹴りながらカラビナでつるした自分の体をロープを引き持ち上げる、これの繰り返しで面白いように登っていけることが判りました。木の上から見る森はいつもと違い、鳥になった気分を味わえました。



昼には1杯50円でトン汁が振舞われ、食後には蛭川さんのオカリナ演奏を楽しみました。



午後のイベントの華は丸太切り大会です。今年は参加者にクラブオリジナルの焼印のペンダントを賞品として出すこととしたため、皆結構力が入りました。丸太は直径10cm程度のヒノキの間伐材のため丸太と呼ぶにはかわいらしいのですが、のこぎりは錆びて切れ味の悪いものを使ったため子どもたちにとっては結構大変な様子でした。



他にも、土木事務所の皆さんによる竹馬体験や、八事の蝶々の製作（今年は新作のアサギマダラが人気）、さらに、竹炭焼きの見学など、天候に恵まれ最後まで楽しく過ごすことができました。



シリーズ『森の住人たち』⑩ ～カケス（懸巢）～ 森づくりを担う

カケス／カラス科

全長／33cm 環境／平地から山地の林



カケスは160円切手の図柄に採用されている。

散策路のかたわらに羽根が散乱していた。青の濃淡・白・黒の鮮やかなその色彩は、カケスの羽根。おそらくオオタカなどの猛禽類に襲われたのだろう。

昨秋に鹿児島奄美大島を訪れ、国の天然記念物であるルリカケス（瑠璃懸巢）を現地にて観察。瑠璃色の羽根はヨーロッパで帽子の飾りとして人気があったという話に、うなづく。しかし、カケスの羽根の美しさは、それに勝るとも劣らない。見事なコントラストに魅了される。

カケスは「懸巢」と表記するように、木に枯れ枝で巣を懸けるからである。好んでカシなどのどんぐりの実を食べるのでカシドリ（榎鳥）ともいわれる。のどにある袋状のものに5～6個ほどのどんぐりを蓄えることができるという。鳥の観察を始めた頃に、シラカシの梢

から勢いよく飛び立つ姿を目にしたことがあり、なるほど・・・と納得したものだ。

カケスの英名は、「Jay」というが、鳴き声を「ジェイ ジェイ」と、とらえての命名だろう。聞きようによっては「ギャア ギャア」とも。モズの鳴き真似上手はよく知られるところだが、カケスもまた鳴き真似上手だ。

カケスは賢い。秋、せっせとどんぐりを地中に貯蔵し、食べ物の少なくなる冬に備える。厳しい季節を生きぬくための処世術である。しかし食べ忘れることもある。思いもよらない場所にどんぐりの木が芽吹く理由である。カケスは森の再生に一役買っているといえるだろう。むろんカケスの意図するところではないにしろ森づくりをする仲間だと思うと、親近感を覚えるのは私だけだろうか。

（文責 自然案内人 近藤 記巴子）